William Faulkner と横溝正史
——階級の越境に対するヒステリーとしてのゴシック

大地　真介

拙論「フォークナーと横溝正史——アメリカ南部と日本のジレンマ」において、アメリカの純文学の代表的作家 William Faulkner（1897-1962）の作品と日本の大衆文学を代表する横溝正史（1902-1981）の作品には一見何の接点もないようにみえるが実は非常によく似ているということをその理由と共に指摘した。ただし、同論文では、両作家の作品に共通するゴシック性に関しては考察しなかったので、そのゴシック性について本論文で分析したい。まず、本論考の前提となる「フォークナーと横溝正史——アメリカ南部と日本のジレンマ」の論旨を以下で述べる。

Faulkner は、ノーベル賞を受賞するなどアメリカの純文学作家の代表格だが、一方、横溝は、文庫本の売れ行きだけでも 1981 年の時点で「空前の 5,500 万部」に達し（小嶋 99、横溝『金田一耕助のモノローグ』 136）、また、文藝春秋編『東西ミステリーベスト 100』の新版（2013）の国内編「作家別ベスト 30」で他を大きく引き離して一位であり（185）、まさに日本の大衆文学作家の筆頭である。この互いに別世界に存在しているかのような両作家の作品には、意外に類似点が多い。横溝の最大のヒット作である金田一耕助もの——「金田一サーガ」（昭和探偵小説研究会 24）と呼ばれることもある——と Faulkner 作品の代名詞ヨクナパトーファ・サーガ（Yoknapatawpha Saga）は、実は同じテーマを扱っている。すなわち、複雑な血脈、旧家や貴族の近親相姦、前近代的な慣習、封建的な世襲、敗戦、戦後の混乱、近代化の波、田舎の閉鎖的な共同体と余所者の軋轢、新興勢力の台頭、旧家や貴族の没落や断絶などである。金田一耕助の初登場作品であると同時に、横溝の、そして日本の推理小説の最高峰の一つである『本陣殺人事件』（1946）——文藝春秋編『東西ミステリーベスト 100』の旧版（1986）でも新版でも日本の歴代推理小説のベスト 10 に入っている——は、Faulkner の代表的作品 *The Sound and the Fury*（1929）の Quentin Compson のセクションと酷似している。すなわち、両作品とも、戦前の封建的な時代が終息し近代化の波が押し寄せる田舎を舞台としており、家柄に固執する母親や知的障害のある末子がいる旧家のインテリの長男が処女性に執着するあまり自殺し、結局一家は没落することになるという話である。これは一例にすぎず、Faulkner 作品と横溝作品には同じプロットが数多く登場している。

真山仁は、金田一耕助は戦前の日本に対するノスタルジーの体現者だと主張しているが（57-58）、筆者は、金田一の言動を分析したり、金田一サーガに頻出する「能率的」という言葉がアメリカと結びついている点などに注目することによって、〈金田一はアメリカと戦前の日本の間で板挟みになっている自己矛盾の人であり、それゆえに金田一は、よく言われるように「頼りない探偵」（別冊宝島編集部 6）にならざるをえない〉ということを詳細に指摘した。

Faulkner の作品と横溝の作品は極めてよく似ているが、横溝の蔵書リストに Faulkner 作品はないし（江藤 309-19）、横溝の随筆やインタヴューをくまなく調べてみても、横溝が Faulkner を読んだ気配もないことから、横溝は Faulkner の影響を受けていないとするのが妥当であり、横溝作品が Faulkner 作品と酷似しているのは、横溝が描いた日本社会と Faulkner が描いたアメリカ南部社会が非常によく似ているためだと考えられる。日本のアメリカ文学研究においては Faulkner の研究者が最も多いが、平石貴樹は、Faulkner が日本で早くから受容・評価されてきた理由として、「個人主義」のアメリカにおいて例外的にアメリカ南部の人々が、「土地所有にもとづく農業生活を基盤とするので、代々おなじ土地に住みつき、家父長制などによって土地を相続することによって、家系と共同体を守ってきた」点で日本の人々と似ていたからだと指摘している（389-90）。ここで述べられているアメリカ南部と日本というのは、戦争――それぞれ南北戦争と太平洋戦争――での敗北以前のアメリカ南部と日本といえる。「家父長制」に着目して更に述べると、戦前の日本は強固な家父長制の社会だったが、戦前のアメリカ南部、すなわち旧南部も同様であり、黒人奴隷制度を正当化するために南部の白人は、妻子を庇護するように「愚かで無能な」黒人を守ってやっているのだと主張し（Wilson 106, 203）、この父親的温情主義（paternalism）により家父長制が極めて堅固であった。平たく言えば、（旧南部以外のアメリカを〈アメリカ〉と表記すると）〈アメリカ〉が「個人主義」ならば旧南部と戦前の日本は家族主義であり、家族主義の旧南部と旧日本は、個人主義の〈アメリカ〉との戦争に敗れ、大きなダメージを受けたのである。さらに言えば、戦前の社会にも問題があり、地主が、アメリカ南部では黒人、日本では小作人から搾取して富を独占していた。旧南部では黒人は奴隷として差別されていたが、日本においても、『本陣殺人事件』で一柳家が小作人の娘の久保克子を見下していたように、家柄を鼻にかけた地主たちが小作人を差別していた。また、同作品と並ぶ横溝の代表作である『獄門島』（1947）や『犬神家の一族』（1950）では封建的な世襲が事件の核心であり、Faulkner 作品と同じく横溝作品は、過去（戦前）の悪しき慣習が現在にまで影響を及ぼしているさまを描いているのである。

Faulkner は、「南部の呪いは奴隷制度である」（Gwynn 79）と発言しているように、旧南部社会には致命的な問題があったことを痛感していたものの、当時没落しかかっていた旧南部貴族の跡取りの立場としては、旧南部の崩壊を単純に喜ぶこともできず、ジレンマに陥っていたが、横溝も、没落した旧家の人間であると同時に（横溝『横溝正史の世界』 276-78）、アメリカの探偵小説に夢中になるなど板挟みの状態にあった（横溝『探偵小説五十年』 201-15）。両作家の矛盾するような姿勢は、それぞれの作品に――横溝の場合は特に金田一の矛盾した姿勢に――反映されており、「〈アメリカ〉に惹かれるが、戦前の社会にも未練がある。〈アメリカ〉には問題があるが、戦前の社会にも問題があった」というジレンマが Faulkner と横溝の作品の核となっているのである。[1]

以上が拙論「フォークナーと横溝正史――アメリカ南部と日本のジレンマ」の論旨であるが、これを踏まえて、Faulkner の作品と横溝の作品に共通するゴシック性について考察していきたい。ゴシック小説を起源とする推理小説というジャンルに属する金田一サーガは、南部ゴシック（Southern Gothic）のヨクナパトーファ・サーガと同様、多くのゴシック小説的要素を持っている。古い大きな屋敷、廃墟、過去の重荷、宿命、流血や殺人、近親相姦、心の闇、幽霊、恐怖や怪奇などがそうである。Faulkner の作品の中で最もゴシック色が濃厚なのは "A Rose for Emily"（1930）と *Absalom, Absalom!*（1936）であるが、両作品には、屋敷での逼塞・幽閉というモチーフがある。"A Rose for Emily" に関して言えば、Emily Grierson が Homer Barron の死体を屋敷に隠して添い寝していたが、「死仮面」（1949）、「湖泥」（1953）、「生ける死仮面」（1953）、「花園の悪魔」（1954）、「睡れる花嫁」（1954）、「蠟美人」（1956）などの金田一ものにも死体愛好癖が登場している。*Absalom, Absalom!*に関しては、殺人を犯した、貴族の跡取り Henry Sutpen は、実は Sutpen 屋敷に戻って隠れ住んでいたが、これは、横溝の『八つ墓村』（1949）において、名家の跡取りで殺人犯の田治見要蔵が田治見邸の地下の鍾乳洞に潜んでいたことを彷彿させる。さらに言えば、要蔵は、Homer Barron と同じく、毒殺されて幽閉されミイラ化した状態で発見されている。

名著 *Love and Death in the American Novel* においてアメリカ文学のゴシックを歴史的に分析した Leslie A. Fiedler は、南部ゴシックと異人種間結婚・混血（miscegenation）の密接な関係を指摘し（406-07, 411-12）、それを踏まえて Eric J. Sundquist は、南部ゴシックの根底には「異人種間結婚（混血）に対するヒステリー」があると一言述べている（46）。実際、ゴシック色の濃い *Absalom, Absalom!*では、後に南部貴族になる Thomas Sutpen は、妻 Eulalia に黒人の血が流れている可能性があるため Eulalia と息子 Charles Bon を棄てているし、また、その Bon は、Sutpen の後妻の娘 Judith と婚約するが、異人種間結婚を阻

止しようとする Sutpen の跡取り息子 Henry によって殺害されている。

Absalom, Absalom! と同様にゴシック小説的な "A Rose for Emily"でも、異人種間結婚に対するヒステリーがうかがえる。旧南部貴族 Emily Grierson が黒人召使と二人きりで世間から隔絶した生活を送るさまは、Faulkner の *Light in August*（1932）における、同じく旧南部貴族である Gail Hightower の同様な生活を思い起こさせる。

> [Hightower] still kept the cook, a negro woman. He had had her all the time. But they told Byron how as soon as his wife was dead, the people seemed to realise all at once that the negro was a woman, that he had that negro woman in the house alone with him all day. And how the wife was hardly cold in the shameful grave before the whispering began. About how he had made his wife go bad and commit suicide because he was not a natural husband, a natural man, and that the negro woman was the reason. And that's all it took; all that was lacking. Byron listened quietly, thinking to himself how people everywhere are about the same, but that it did seem that in a small town where evil is harder to accomplish, where opportunities for privacy are scarcer, that people can invent more of it in other people's names. Because that was all it required: that idea, that single idle word blown from mind to mind. One day the cook quit. They heard how one night a party of carelessly masked men went to the minister's [Hightower's] house and ordered him to fire her. Then they heard how the next day the woman told that she quit herself because her employer asked her to do something which she said was against God and nature. And it was said that some masked men had scared her into quitting because she was what is known as a high brown and it was known that there were two or three men in the town who would object to her doing whatever it was which she considered contrary to God and nature, since, as some of the younger men said, if a nigger woman considered it against God and nature, it must be pretty bad. Anyway, the minister couldn't—or didn't—get another woman cook. Possibly the men scared all the other negro women in town that same night. So he did his own cooking for a while, until they heard one day that he had a negro man to cook for him. And that finished him, sure enough. Because that evening some men, not masked either, took the negro man out and whipped him. And when Hightower waked the next morning his study window was broken and on the floor lay a brick with a note tied to it, commanding him to get out of town by sunset and signed K.K.K.（450-51）

黒人召使と二人きりで世間から隔絶した生活を送る Hightower は、その黒人女性との性的関係を疑われただけでなく、Hugh M. Ruppersburg も解説しているように、彼女の後任として雇った黒人男性との関係まで疑われてクー・クラックス・クランに脅されたのである（47）。このような南部社会においては、Hightower と同じく Emily が世間との交渉を一切絶って黒人召使と二人きりで暮らすさまは、黒人との性的関係を連想させるものだといえる（実際にはそのような関係はないにせよ）。さらに注目すべきは Emily の恋人 Homer Barron についての説明の箇所である。

> The town had just let the contracts for paving the sidewalks, and in the summer after her [Emily's] father's death they began the work. The construction company came with niggers and mules and machinery, and a foreman named Homer Barron, a Yankee, a big, dark, ready man, with a big voice and eyes lighter than his face. The little boys would follow in groups to hear him cuss the niggers, and the niggers singing in time to the rise and fall of picks. Pretty soon he knew everybody in town.（124）

この Homer の人物紹介の箇所は、黒人の要素で彩られている。すなわち、Homer は黒人と一緒になって働いており、また、南部においては、"dark"な肌というのは黒人のイメージと密接に結び付いている。Theresa M. Towner と James B. Carothers も述べているように、Homer が黒人の血を引いていると考えるのは早計であるが（63）、Emily が結婚しようとする Homer は、少なくとも黒人を連想させる人物である。つまり、"A Rose for Emily" のゴシック性の根底には、やはり異人種間結婚（混血）に対する過剰反応・ヒステリーがある。だからこそ、Emily と、黒人のイメージを帯びた Homer の結婚は、*Absalom, Absalom!*の Sutpen と Eulalia の結婚、Judith と Bon の結婚と同様、不成功に終わるものとして描かれているのである。[2]

Faulkner 作品の中で、*Absalom, Absalom!*と "A Rose for Emily"に次いでゴシック色が濃厚なのは、先ほど言及した *Light in August* だが、同作品も上記の二作品と同様、異人種間結婚に対するヒステリーが反映されている。黒人の血が流れている可能性がある、Joe Christmas の父親は、Joe の母親 Milly Hines と駆け落ちしようとするが、Milly の父親 Doc Hines によって射殺されており、また、Joe は、Joanna Burden と愛し合うが結局彼女を殺し、最終的には黒人としてリンチで殺害されている。

拙論「フォークナーと横溝正史——アメリカ南部と日本のジレンマ」で指摘したように、Faulkner の作品と横溝の作品は極めてよく似ているが、とすれば、両作家の作品の

ゴシック性も類似している可能性がある。ただし、ヨクナパトーファ・サーガのゴシック性の根底には人種の越境に対するヒステリーがあるが、金田一サーガには、人種の問題は登場しない。ここで注目すべきは、黒人奴隷制度によって白人の貴族が統治していた南部社会では人種は階級と表裏一体の関係にあったという点であり、人種の越境に対するヒステリーは階級の越境に対するヒステリーと言うこともできる。横溝作品のゴシック性も階級の越境に対するヒステリーの表れと考えられるが、実際、金田一サーガには身分違いの結婚が頻出し、なおかつ、身分違いの結婚は成就せず、成就したとしても、少なくとも夫か妻のどちらかが死に、結婚後に生まれた子は殺されている。以下、身分違いの結婚が登場する金田一ものを発表順にみていきたい。なお、誤解のないよう念のために言っておくと、身分違いであるがゆえに結婚はうまくいかないと言いたいのではなく、横溝作品のゴシック性の根底には階級の越境に対するヒステリーがあるがゆえに、同作品中の身分違いの結婚はうまくいかないように描かれているということを確認したいのである。

まず金田一サーガ第一作『本陣殺人事件』においては、名門の一柳家の長男である賢蔵は、「一族こぞって反対」するも小作人の娘の久保克子と結婚しようとするが（18）、婚礼の夜に彼女を殺害したのち自殺する。次作『獄門島』では、旧家の鬼頭家の長男である与三松が、親の反対を押し切って、「どこの馬の骨かわから」ない旅芸人お小夜と結婚するが（243）、お小夜は狂死し、与三松も発狂し、二人の子供である三人姉妹は最終的に全員殺されている。『犬神家の一族』においては、「犬神財閥の創始者、日本の生糸王」である犬神佐兵衛が（5）、50歳を過ぎて、犬神製糸工場の女工である青沼菊乃との間に静馬という長男をもうけるが、佐兵衛の娘たちは、佐兵衛と結婚しないよう菊乃を追放する。『女王蜂』（1951）では、大道寺欣造が女中の蔦代との間に長男をもうけるが、欣造の妻が死んだ後も、蔦代は、「じぶんのような身分の賤しいものが由緒ある大道寺家の籍に入るなんて、とんでもないことだ」と言い張り（50）、二人は結婚しなかった。

続いて「湖泥」においては、「無一物の引揚者の娘など、いかにべっぴんだからと、嫁にしようなどと考えるもんですか」と村の者が言うように、名家の西神家は、御子柴一家を「まるで牛馬を扱うような調子」で「ずいぶん邪険にし」、当初は、御子柴家の娘である由紀子を嫁として迎えるつもりなどさらさらなかったが（64-65）、由紀子は、西神家と並ぶ旧家である北神家の長男と婚約する。ただし、彼女は結婚前に殺されている。「蜃気楼島の情熱」（1954）では、村松医師に育てられ看護婦をしていた孤児の静子が、村松の親戚である大富豪の志賀泰三と結婚して子供を宿すが、「看護婦から島の女王に出世した」ことに対する嫉妬と金銭欲にかられた村松によって殺害される（230）。「蠟美人」

においては、「日本の政界ならびに教育界の名門」伊沢家の長男である信造が、家族と対立してまでも、「スキャンダルのかたまりみたいな」女優の立花マリと結婚するが(153)、結局マリに殺されている。『悪魔の寵児』(1958) では、「立身出世主義の権化」風間欣吾が、出世のために望月巌太郎大将の娘の種子と結婚するが (78)、離婚する (後に種子は殺害されている)。その後、風間は、終戦時のどさくさに紛れて成り上がり、昔使えていた五藤伯爵家の娘の美樹子と結婚するが、美樹子は殺される。「壺中美人」(1960) においては、旧家出身の大地主である井川謙造が (52, 123-25)、「キャバレーのダンサー」のマリ子と結婚するが (30)、彼女に殺害されている。

『迷路荘の惨劇』(1975) では、「新興成金」の篠崎慎吾が (26)、「公卿華族の末裔」で古館辰人元伯爵の妻である倭文子と結局結婚するが (27)、倭文子は篠崎を殺害しようとして事故死する。『病院坂の首縊りの家』(1975) においては、「大藩の典医」法眼琢磨の長男である鉄馬は、宮坂すみとの間に長男をもうけるが、すみが貧しく「氏素性も賤しかった」ため (20)、彼女との結婚を琢磨に許されなかった。『悪霊島』(1978) では、平家の落人の子孫で「島の支配階級」の刑部家の当主・大膳の姪孫にあたる巴が(34-35)、越智竜平と駆け落ちするが、越智家を海賊の子孫の漁師と蔑む大膳が、「身分ちがいもはなはだしい」と言って二人の仲を引き裂いている (113)。

Leslie A. Fiedler は、異母妹 Judith Sutpen と、黒人の血を引いている可能性がある異母兄 Charles Bon の結婚を扱う *Absalom, Absalom!*が、アメリカのゴシック小説の重要な社会学的テーマである黒人奴隷制度のテーマに、アメリカのゴシック小説の重要な性的テーマである近親相姦のテーマを結びつけることによってゴシック的恐怖を高めていると指摘した (413-14)。[3] 横溝にも同様な作品があり、それは、文藝春秋編『東西ミステリーベスト 100』の新版において『本陣殺人事件』、『獄門島』、『八つ墓村』および『犬神家の一族』と共にランクインしている横溝の代表的作品『悪魔の手毬唄』(1957) である。まず、『悪魔の手毬唄』でも身分違いの結婚は成就していない。「下民」として「水呑み百姓のような連中からも一段さがったものとして扱われてきた」青池源治郎は (25, 446)、恩田幾三という別人に成りすまして、名門の由良家と仁礼家の女性たちとの間に子供をもうけるが、結婚することはない。また、源治郎の息子の青池歌名雄は、由良家と仁礼家から両家の娘——それぞれ泰子と文子——との結婚話を持ち込まれるが、泰子も文子も結婚前に殺害される。実は泰子も文子も、源治郎の子であり、歌名雄と結婚していれば身分違いの結婚になっていただけでなく近親相姦になっていた。つまり、*Absalom, Absalom!*と同じく『悪魔の手毬唄』は、そのゴシック性の根底に階級の越境に対するヒステリーを抱えているだけでなく、同ヒステリーに近親相姦のモチーフを付け

加えてゴシック的恐怖を高めているのである。

以上みてきたように、横溝の作品においては、身分違いの結婚が頻出し、なおかつ、身分違いの結婚は成就せず、成就したとしても、夫か妻が死に、結婚後に生まれた子は殺されている。身分違いの結婚がうまくいかないケースが若干あるということであれば話は別だが、数多く登場する身分違いの結婚がことごとく不首尾に終わることには、階級の越境に対する拒絶反応が反映されているとみて間違いない。やはり、作品のゴシック性の根底に階級の越境に対するヒステリーがあるという点でも Faulkner 作品と横溝作品は非常によく似ているのである。

『悪魔の手毬唄』において、〈「下民」あつかいされた青池源治郎の息子の歌名雄は名家の娘と結婚できないのではないか〉と言われた別所辰蔵は、「それは昔のはなしで……戦後はもっぱら人物本位ちゅうことですんじゃ。家柄なんてもんのねうちは、もうさっぱりわやくそで」と述べている（174）。したがって、Faulkner と横溝の作品におけるゴシック性の根底に階級の越境に対する拒絶反応があることは戦前の社会に対する両作家のノスタルジーを表しているように見えるかもしれないが、話はそう単純ではない。彼らが戦前社会へのノスタルジーに浸っているのであれば、戦後の社会を象徴するような身分違いの結婚、すなわち目を背けたいはずの身分違いの結婚をこうも頻繁に描いたりしないはずだからである。また、両作家が戦後社会を全面的に肯定しているのであれば階級の越境を完全に肯定的に描くはずであるが、そうもしていない。拙論「フォークナーと横溝正史――アメリカ南部と日本のジレンマ」において、「〈アメリカ〉に惹かれるが、戦前の社会にも未練がある。〈アメリカ〉には問題があるが、戦前の社会にも問題があった」という Faulkner と横溝のジレンマが両作家の作品の核であることを指摘したが、そのジレンマが作品中の階級の越境にも反映されているといえる。階級の越境を肯定も否定もしきれない Faulkner と横溝は、やはり、個人主義の〈アメリカ〉と家族主義の戦前社会の間で板挟みになっているのである。

注

1　アメリカ社会の問題の典型例としては、離婚率の異常な高さが挙げられ、二組の夫婦のうち一組が離婚している（小田 877）。家族主義ではなく個人主義のアメリカでは離婚は日常茶飯事なのである。なお、Faulkner は、妻と極めて不仲であったが、娘と離れたくないため離婚していない（Williamson 255, 286）。

2　James G. Watson も述べているように、Homer Barron という名前は、Homer と添い遂げられず彼の死体と添い寝するしかない Emily の「不毛な家庭生活（barren home）」（138）

を暗示しているといえる。

3　南部ゴシックが人種・階級の越境に近親相姦を結びつけることについて更に言えば、近親相姦は、身分が高いもの（白人）同士であろうと身分が低いもの（黒人）同士であろうと、結果的に階級・人種の境界を保持することにつながるため、階級・人種の越境に対するヒステリーが根底にあるゴシックと近親相姦のテーマは相性が良いのである。ただし、*Absalom, Absalom!*においては、異母兄 Bon と異母妹 Judith の近親相姦は、Bon 自身に黒人の血が流れている可能性があるため、階級・人種の境界を、保持するどころか、むしろ脅かすものとして機能している。つまり、*Absalom, Absalom!*では、本来であれば、異なる階級間・人種間の混血を回避できるはずの近親相姦が、混血を推進する働きをしており、強烈なアイロニーとなっているのである。

引用文献

Faulkner, William. *Light in August. Novels 1930-1935: As I Lay Dying; Sanctuary; Light in August; Pylon*. Ed. Joseph Blotner and Noel Polk. New York: Library of America, 1985. 399-774.

——. "A Rose for Emily." *Collected Stories of William Faulkner*. New York: Vintage International, 1995. 119-30.

Fiedler, Leslie A. *Love and Death in the American Novel*. Normal: Dalkey Archive, 1997.

Gwynn, Frederick L., and Joseph L. Blotner. *Faulkner in the University*. Charlottesville: UP of Virginia, 1959.

Ruppersburg, Hugh M. *Reading Faulkner:* Light in August. Jackson: UP of Mississippi, 1994.

Sundquist, Eric J. *Faulkner: The House Divided*. Baltimore: Johns Hopkins UP, 1983.

Towner, Theresa M., and James B. Carothers. *Reading Faulkner:* Collected Stories. Jackson: UP of Mississippi, 2006.

Watson, James G. "Faulkner: The House of Fiction." *Fifty Years of Yoknapatawpha: Faulkner and Yoknapatawpha, 1979*. Ed. Doreen Fowler and Ann J. Abadie. Jackson: UP of Mississippi, 134-58.

Williamson, Joel. *William Faulkner and Southern History*. New York: Oxford UP, 1993.

Wilson, Charles Reagan, ed. *The New Encyclopedia of Southern Culture*. Vol. 13. Chapel Hill: U of North Carolina P, 2009.

江藤茂博・山口直孝・浜田知明編、『横溝正史研究』第 5 号、戎光祥出版、2013 年。

大地真介、「フォークナーと横溝正史——アメリカ南部と日本のジレンマ」、『フォークナ

一』第 16 号、2014 年、79-90。
小田隆裕・柏木博・巽孝之・能登路雅子・松尾弌之・吉見俊哉編、『事典 現代のアメリカ』、大修館書店、2004 年。
小嶋優子・別冊ダ・ヴィンチ編集部編、『金田一耕助 The Complete』、メディアファクトリー、2004 年。
昭和探偵小説研究会編、『横溝正史 全小説案内』、洋泉社、2012 年。
平石貴樹、『アメリカ文学史』、松柏社、2010 年。
文藝春秋編、『東西ミステリーベスト 100』、文藝春秋、1986 年。
——、『東西ミステリーベスト 100』週刊文春臨時増刊号、文藝春秋、2013 年。
別冊宝島編集部編、『僕たちの好きな金田一耕助』、宝島社、2009 年。
真山仁、横溝正史、『真山仁が語る横溝正史』私のこだわり人物伝、角川書店、2010 年。
横溝正史、『悪魔の寵児』、改訂版、角川書店、1996 年。
——、『悪魔の手毬唄』、改訂版、角川書店、1996 年。
——、『悪霊島』上巻、改訂版、角川書店、1996 年。
——、『犬神家の一族』、改訂版、角川書店、1996 年。
——、『金田一耕助のモノローグ』、第三版、角川書店、1997 年。
——、『獄門島』、改訂版、角川書店、1996 年。
——、『壺中美人』、角川書店、1976 年。
——、「湖泥」、横溝『人面瘡』57-161。
——、『女王蜂』、改訂版、角川書店、1996 年。
——、「蜃気楼島の情熱」、横溝『人面瘡』163-233。
——、『人面瘡』、角川書店、1996 年。
——、『探偵小説五十年』、講談社、1977 年。
——、『病院坂の首縊りの家』上巻、改訂版、角川書店、1996 年。
——、『本陣殺人事件』、改訂版、角川書店、1996 年。
——、『迷路荘の惨劇』、改訂版、角川書店、1996 年。
——、『横溝正史の世界』、徳間書店、1976 年。
——、「蠟美人」、『首』、改訂版、角川書店、1996 年、127-216。